

# 2018年度幹事報告

---

## 庶務幹事この一年

内海 渉 (量子科学技術研究開発機構)

石川哲也会長から小杉信博会長へのバトンタッチに伴って幹事メンバーも一新されましたが、その任期も折り返しの1年が過ぎました。

これまでの執行部の方々の多くの尽力により、昨年度までに事務局業務移行が完了しました。今年度、新事務局は着実に軌道に乗り、安定した学会運営を行うことができます。昨年度から導入された選挙の電子化についても、大きなトラブルを生じることなく学会員の皆様に定着したものと考えています。㈱ポラリス・セクレタリーズ・オフィス様には、日頃の円滑な業務に対して、あらためて御礼を申し上げるものです。また、評議員会や総会の運営をはじめとする年間を通しての定例作業に関して、歴代の庶務幹事、特に前任の藤原明比古先生が、その多くをフォーマット化して下さったおかげで、仕事の見通しが明確になり、作業を効率的に進めることができました。

放射光科学賞が新しく創設され、今年、北村英男先生がその第1回放射光科学賞を受賞されたことは、学会の歴史に刻まれる大きな事象です。奨励賞に関しても優秀な若

手研究者が受賞され、これらの方々の今後の今後が大変楽しみです。歴代の奨励賞受賞者リストを眺めると、奨励賞受賞者の方々の多くがその後放射光科学の中核を担っておられることがよくわかります。一方で、功労報賞はここ数年受賞者なしの状況が続いています。候補者がおられましたら、是非ともご推薦いただければ幸いです。

会員の皆様、すでにご存じのとおり「官民地域パートナーシップ」により次世代放射光施設(軟X線向け高輝度3 GeV級放射光光源)の推進をはかることが、本年1月に文部科学大臣から発表されました。これにより、2014、2017の2期に渡って日本学術会議マスタープラン及びそれに続く文科省ロードマップに、放射光学会が申請していた「新しい時代の科学技術立国を支える放射光科学の高輝度光源計画」が、その実現に向けて、大きな一歩を踏み出したこととなります。国の施設整備予算が認められれば、今後、具体的建設に向けた動きが急ピッチで進むはずで、放射光学会としてこれを支援するとともに、進捗をしっかり注視していきたいと思っております。

---

## 行事幹事この一年

組頭広志 (東北大学多元物質科学研究所/高エネルギー加速器研究機構物質構造科学研究所)

2017年10月から正式に行事幹事に就任いたしました、早いものでもう一年が経ちました。行事幹事は組織委員長として現地実行委員と共に年会・放射光科学合同シンポジウムを司る重責に加えて、若手研究会や基礎講習会なども行う多忙な役職です。そのことは重々承知しておりましたが、まさか私自身の異動も重なるとは思っておらず、ただただ実務に追われる一年でした。その中でも、私なりに少しでも今までのやり方を変えてみようといういろいろ試みたりした一年でした。以下、第10回基礎講習会、第10回若手研究会、第32回年会・放射光科学合同シンポジウム(JSR2019)準備の三件について、この一年の報告をさせていただきます。

まず、基礎講習会ですが、これまで第3回を除いてずっと東京で開催されてきました。これは「基礎講習会の黒字化」という点では成功を取めたのですが、一方で参加し

た学生の出身大学を見ますと、80~90%が関東圏の学生という状態でした。そのため、放射光ユーザーは各地にいることを踏まえて、少なくとも私の任期中の第10回と11回は、基礎講習会を東京以外で開催しようと考え、第10回は仙台(東北大学)で行いました。その詳細は別紙に譲るとして、今回は東北放射光施設建設へ向けた期待が高まる中、東北地方の企業の方や学生が参加する、とても活発な基礎講習会になりました。来年度も仙台で(もしくは再び東京で)開催すると楽なのですが、当初の方針通り次回第11回は、名古屋で開催しようと考えております。

次に若手研究会ですが、これまた詳細は別紙に譲るとして、今年も研究会自体は成功裏に終わりました。その一方で、「放射光学会研究会」ではなく、「若手」がつく研究会ですので、荒削りでもいいのもっと萌芽的で、今後の放射光科学における新しい潮流を模索するような研究会が多

数提案されないものかという議論させていただきました。といいますのは、もちろん、これまでの若手研究会の内容やそこで行われた若手間の交流を否定するものではありませんが、第4回以降は若手研究会への応募者がほぼ行事委員であり、またここ数回は応募が1件のみという事実があります。また、内容もJST研究開発戦略センターの「研究開発の俯瞰報告書」等ですでに提案されている戦略目標と類似の内容が多いように見受けられます。若手の会員の比率と各分野での活躍を見ますと、もっと多くの応募、さらには新機軸を打ち立てるような野心的なテーマでの応募があってよいと思われます。これまでの若手研究会の形を踏襲する必要は全くありませんので、次回からは若手からの挑戦的な応募を期待したいと思います。

JSR2019につきましては、実行委員会の妹尾与志木委

員長、副島雄児副委員長、郭其新副委員長、プログラム委員会の高原淳委員長、岡島敏浩副委員長のもとで、開催に向けた準備が鋭意進められております（本稿執筆時点）。今回は福岡国際会議場での開催ということで、予期せぬ問題も多々ございましたが、交通アクセスもよく多数の参加者が見込める盛大な学会になると思います。

最後になりますが、矢代航前行事幹事、榎ボラリス・セクレタリーズ・オフィスの中村千佳さん、第10回基礎講習会講師の先生方には、たいへんお世話になりました。この場を借りて改めて御礼申し上げます。また、行事委員の方々、JSR2019関係委員会メンバーの皆様、学会事務局の佐藤亜己奈さん、には、引き続きお世話になりますが、何卒よろしく願い申し上げます。

## 編集幹事この一年

籠島 靖（兵庫県立大学）

昨年の10月に前任の吾郷日出夫氏（理化学研究所）から編集幹事を引き継ぎ、21名の編集委員の方々と編集委員会を組織し、学会誌「放射光」の編集業務を担当しています。放射光科学のコミュニティは、加速器という大型装置技術・通常サイズの実験装置・検出器、物理学・化学・生物学・医学・工学、物質科学・生命科学・地球科学、学術と産業利用、計算科学や他量子ビームとの融合など、まさに学際的なコミュニティとなっています。この幅広いスペクトルからなる放射光学会員の皆様を繋ぐ媒体として学会誌「放射光」は大きな役割を果たしてきていると思います。

学会誌のこの1年間をまとめると、30巻6号から31巻第5号までに解説記事6篇、トピックス記事11篇、放射光ニュース12篇、実験技術2篇の記事を掲載しました。また、31巻第2号では、放射光学会が設立30年の節目を迎えたことから、放射光科学30年の発展を俯瞰するとともに次の10年を展望する特集号を企画しました。今期は、放射光学会設立30周年、SPring-8 供用開始20周年、物質構造科学研究所設立20周年が重なる、放射光コミュニティには記念すべき年となりました。「SPring-8 二十周年式典・記念シンポジウム報告（30巻6号）」と「物質構

造科学研究所設立20周年記念シンポジウム「物質構造科学の過去・現在・未来」報告（31巻3号）」をご参照下さい。節目節目で過去を振り返るとともに未来を展望するのは世の習いですが、今後40周年、50周年と学会の歴史が続き、学会誌「放射光」がその大きな役割を果たしていくことを期待しています。

今期には、次世代放射光施設にも大きな動きがありました（31巻2, 3, 4, 5号）。また、当学会の会長を務められた松下正先生と上坪宏道先生が逝去されました。雨宮慶幸先生（元会長）と石川哲也先生（前会長）に追悼記事をお書きいただきました（31巻第3号, 2号）。

学会誌の記事で振り返ると、今期は当学会にとって大きな節目の年であったように思います。

学会誌「放射光」には、総説としての「解説」、重要な研究の紹介である「トピックス」、新しい実験技術を紹介する「実験技術」、放射光施設の動向や計画を紹介する「動向」など、会員や施設からの多様なレベルでの情報発信に使える記事の種類があります。学会誌「放射光」を情報発信の場としてご活用頂くことが、学会誌「放射光」をより良くする助けとなると考えます。会員の皆様のご協力をお願い申し上げます。

## 渉外幹事この一年

矢橋牧名（高輝度光科学研究センター）

渉外幹事は、国内外の学会・機関等との窓口となって連携を深め、放射光の認知度を高めることを主なミッションとして活動しています。ここでは、この1年間で特に印象に残った事項として、アジアオセアニア放射光フォーラム（AOFSRR）について記します。AOFSRRは、高田昌樹、原田慈久両先生がSecretary Generalを続けて務められ、我が国からの貢献も非常に大きい国際団体として活動がなされています。本年6月で台北にて開催されたシンポジウム（SRI2018のサテライト会合として開催）に私も参加しましたが、日本・韓国・中国・台湾・豪州といったGeV級の放射光施設を有する各国はもとより、タイやシンガポールといった国々も放射光施設の高度化や新設を真剣に検討していることがわかり、社会インフラとしての放射光の重要性が広く認識されているということを改めて

実感しました。さらに、中国では、北京・武漢等の放射光施設、上海の超伝導XFEL施設（SHINE）など、複数の施設を2020年代半ばに稼働させるという野心的な計画が進んでおり、大きな勢いを感じました。世界政治をみると、欧米各国とアジア諸国との関係は極めて複雑化し見通しが悪い状況となっていますが、アジア域内での連携は間違いなく強化される方向であり、その意味でもAOFSRRは今後さらに重要になってくると思われます。小杉会長の方針として、特別賛助会員を擁する放射光学会が、AOFSRRに対する日本の窓口としてしっかりと機能していくことを目標としており、AOFの会合・スクール等に参加する大学院生に対する、学会の新たな支援についても議論がなされています。今後も関係者の方々とともに進めていきたいと考えています。

## 会計幹事この一年

稲田康宏（立命館大学）

2017年10月1日より、小杉会長から会計幹事を仰せつかってから一年が過ぎました。これまでの学会執行部の先生のご尽力と会員の皆様のご協力によって、日本放射光学会は概ね健全な財政状況で運営がなされており、また、2016年度に行われた学会事務局委託先の変更も一段落した状況での引き継ぎでしたが、自身の経験不足が否めず、周囲の方から多くのご助言を賜りながら、会計幹事の職務にあたっております。

学会会計に関わる最近の変化としましては、日本放射光学会年会・放射光科学合同シンポジウム（以下、年会）との関係があります。年会会計の独立と学会会計との関係が整理されたことにより、今後も安定して年会開催が維持できるよう取り組んで参りたいと考えております。また、放射光コミュニティの発展のため、若手研究者の研究成果

の発信活動を学会として支援する取り組みなどの検討も進めております。そのほか、会費納入をお忘れの際にスムーズにお支払いいただける仕組みの導入など、学会の発展と会員の皆様の利便性向上のための取り組みを会計幹事の立場から支えて参ります。

この原稿は10月初旬締め切りで執筆しております、まさに今、2017年10月から2018年9月までの収支決算を行っている段階にあります。年会でのこれまでの黒字収支によって学会の会計には余裕がありますが、年会の収支を抜きにして、学会のみで適切に黒字決算が達成できるよう、残り一年の任期の業務を確実に遂行していく所存です。会員の皆様には、今後ともご協力、ご指導を賜りますよう、よろしくお願いたします。